慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	羅馬に在る日本殉教者圖 : 口繪説明
Sub Title	
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.155(327)- 164(336)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

羅馬に在る日本殉教者圖（口繪説明）

ローマのゼス寺に一六二二年九月十日長崎に於ける殉教者の油繪の額面があることは兼々承知してゐたから、自分は去年四月ローマに往つて耶蘇會本部に秘書ヘルマン・ヘック師を訪問した時、同寺宛の紹介狀を貰ふのが用向の一つであつた。

ゼス寺はウムベルト一世大通を眞直に往つて、ベネチヤ廣場へ出る所を、右にプレビシット町へ曲つて二ッ目の左角にある。耶蘇會の本山だけあつて、流石に堂々たる建物だ。日本第一回の遣歐使節伊東マンショの一行はこの建物の隣のカサ・プロフェッサ Casa Professa に宿り、直ちに本寺へ來て感謝の式を行つたといふ。本寺の出來上つたのが一五八四年、マンショ一行がローマに入つたのが翌八五年の三月であるから、日本流にいへば『木の香の新しい』本堂に跪いて、彼等は出發以後足掛四年の長日月を經て目的地に着いたことを、如何に感謝したであらうなどと想像を廻らしながら、四月十七日午後、自分はギラ〳〵する西日を遮ぎる重い戸と油團のやうなカーテンとを押明けて內へ入つた。

高い天井と太い柱、不充分な光線と沈滯した空氣、是等はカセドラルの共通性で、參拜者は先づ苛々した外界の刺激を忘れて仕舞う。數里の山坂を越えて始めて本堂に達し得る日本の古い寺院とは違ひ、閾一つ跨げば直ちに閑寂の境涯に入つたやうな氣持がする處に、カセドラルの妙味があると思ふ。併も本寺には耶蘇會とは切離すべからざる二つの大きな遺物、即ち左側には耶蘇會の創唱

者で第一の會長であつた聖イグナシウス・ロヨラの遺骸、また右側には同じく耶蘇會創唱者の一人で、日本に始めて耶蘇教を傳へた聖フランシスコ・ザビエーの右腕がある。是等の遺物を拜した自分は今からサクリスタンへ行つて、長崎に於ける殉教者の圖を見ようとするのである。一學生として今日は實に惠まれた日であると、我知らず緊張せざるを得なかつた。

本堂の右手にあるサクリスタンの入口を入り、來意を通ずると、早速油繪のかゝつてゐる細長い部屋へ通された。永山時英氏の對外史料寶鑑その他で御馴染の一六二二年殉教圖（第二圖を見よ）は、部屋を入つて直ぐ左手の壁の上部に掛つてゐる。自分は頸の骨の痛くなるのも忘れて久しい間之を仰視した。さうして日本で出版せられた本圖の複寫には圖の左方の上下が省略せられ、甚だしきは孤形をなしてゐるのがあること、それから刑場を取卷いてゐる婦人の被衣（かつぎ）の模樣が全然省略せられ、恰も白色の被衣を用ひたやうに見えることを想ひ出し少からず不思議の念に打たれた。一體一六二二年圖の寫眞はどうして日本に傳はつたか、誰人が傳へたか、その圖は種々の出版物に轉載せられながら、どの出版物にも由來を明記してない。甲から乙、乙から丙と轉載ばかりするので、圖の一部分を斷切つたり、模樣が見えなくなつたりするやうな不始末を來たしたのであらう。

それよりも尙奇怪なことは、この部屋に別に二枚の殉教圖があるに拘らず、一六二二年圖のみが日本に傳はり、殘りの二枚が傳へられぬことだ。最初に一六二二年圖を傳へた人は、この二枚を全然見なかつたか、或は見たことは見たが、傳へるだけの價値がないと考へて不問に附したか、この二つの外に出ないと思ふ。單に油繪としては、或は一六二二年圖が一番優れてゐるであらう。人物の表情も周圍の光景も能く出てゐる。然し歷史畫としては必ずしも一六二二年圖を以て第一とはいへまい。細長い部屋の正面の窓の上にかゝつてゐる一枚は、一六一九年十一月の殉教圖（第一圖を見よ）で、一六二二年圖の意匠は或は本圖から採つたのではないかと思はれる位だ。又一六二二年圖の右手に

ある一枚は、（第三圖を見よ）一五九七年以後多數の耶蘇會殉教者を一所に集めて描いたもので、斬首・火炙・逆釣・生埋等、刑罰の方法が能く分る。アントニオ・フランシスコ・カルヂムが一六四六年に出版した『日本血染の花束』Fasciculus e Japponicis Floribus, suo adhuc madentibus sanguine compositus A P. Antonio Francisco Cardim にある八十餘枚の銅版圖は、ヒントをこの殉教圖に得たか、然らずとするも同書に見ゆる逆釣生埋等の刑死の圖が西洋畫家の單純なる想像畫でないことが、この油繪と比較して始めて了解せられる。

要するに從來傳へられなかつた二枚は、歴史畫として決して無價値のもので無い。然らば一六二二年圖を最初に日本に傳へた人は、單に同圖だけを見て、殘りの二枚は全然見なかつたか。自分は歸朝以來是等の油繪に對し何か先輩の記事は無いかと段々搜索して見たが、前にも述べた通り、一六二二年圖を載せた諸書には、毫もその圖の由來を說明して無い。何人が最初にこの圖を傳へたかゞ不明である以上、疑を質す手蔓は斷たれてゐる。

先月バリーから取寄せたオスカー・ナホッド氏の著書の中に、同氏が一九〇三年一月二月版の東亞細亞（オストアジアテン）に掲載された『一五六八年ヅラドスの日本地圖と日本殉教者の古畫二面』と題する小論文の抜刷が偶然挾まれてゐた。それはナホッド氏がローマのポスチュラトーレ・ゲネラーレベッカリ師から贈られた二枚の寫眞、一枚は耶蘇會殉教者圖（第三圖に該當す）一枚は一六二二年圖（第二圖に該當す）―に對して加へられた考證である。また友人島文次郎氏が大正十年春ゼス寺で三面の殉教者圖を見られた記事が、翌年二月出版の解放（四卷の二）に出てゐたことを吉田小五郎氏から示された。然らば一六二二年圖を最初に日本に傳へた時生憎その年代は不明であるが、その時から一九〇三年までに、耶蘇會殉教者圖がゼス寺の所藏に歸し、一九〇三年から大正十年までに、一六一九年圖がゼス寺の所藏に歸したか。こんな面倒な推定をするより、上記三面の油畫がどういふ手續でゼス寺に入つたか、直接質問してくれば宜かつたものをと、今になつて後悔してゐます。

油畫のある部屋は細長くて光線の入る窓は僅に

一ケ所である。携帶の寫眞機で面影なりと採影したく、試めして見たが無效であつた。それで後日ヘック師に面會した時、萬一右の油畫を寫眞に撮られるやうな機會があつたら、是非一組貰ゐたいものだと依賴して置いた。自分がヘック師を煩はして勉學上の便宜を得た點はまだ此の外にも色々あるが、それは他日の機會を待つて發表しませう。

十二月ヘック師から大きな書留郵便が屆いた。早速開けて見ると、自分が夢にも忘れなかつた殉教者圖の寫眞が三枚出た。ヘーグの假寓に唯一人ゐる自分には、その時この悅を頒つ友もなかつたが、千里の外に知己を得たといふ嬉しさは今に忘れない。

寫眞に說明の文字が寫つてゐる。擴大鏡を取出して讀んで見ようと度々試みたが、遂に成功せぬさうなると讀みたいといふ念が愈〻高まる。幸ひ歸朝の途次イタリーを經由することゝなつたから、ローマに着くと早速耶蘇會本部を訪問してヘック師に來意を話すと、同師は大いに同情を寄せられ、然らばゼス寺に賴んで額面を下して貰はう、明朝十時寺で落合はう、といふ約束が出來た。

ローマのプロパガンダ・フィデの出身で、現在アポリナレの法學校で寺院法の研究に沒頭して居られる田口芳五郎師とは、自分は留學當初から手紙で知合となり、殊にローマ初遊の節、ヘック師に紹介して下さつたのも同師故、明日の因緣淺からずと信じ、ゼス寺行に同行を求めた處、快く承諾せられた。

昭和五年二月一日自分等三人はゼス寺の一隅油畫のある一室で落合つたが、ヘック師が先着であつたには少からず恐縮した。寺では人手が足りぬと見え階子や棒を借してくれただけなので、自然長身のヘック氏が階子を上下して、額を下づしたり掛けたりする雜役をつとめ、自分等は下から額を受けたり、支へたり、時としては階子の踏段を押へる位であつた。かくして三人が額を集めて讀んだ所を左に記さう。

第一　一六一九年殉教者圖 109 cm. 128 cm.

左方上部に開いた書物の形があつて、其所に題辭がある。剝落して全部は讀盡くせぬが、

Aos 18 de [Noviembre] anno de(1)619
Cidade de Nagc.....Suarscartas Religiosas
....Contra a proibiçao....de mismo....
等の文字が殘つてゐる。一六一九年十一月十八日(元和五年十月十三日)四名の日本人と一名のポルトガル商人とが長崎で火炙となつた。その姓名は
P. Léonard Kimoura レオナルド・キムラ
André Mourayama Tocouan アンドレー・ムラヤド・トクアン
Jean Yochida Chooun ジャン・ヨシダ・ショーウン
Cosme Takeya コスメ・タケヤ
Domingos Jorge ドミンゴス・ジョルジ
第一のキムラはパードレですが、あとの四人は教師を宿泊せしめた罪科で處刑を受けた。殉教の顚末はパジェスの日本耶蘇教史 pp. 420-424 に讓つて略します。本圖の右の下にあるは出島の屋敷らしい、其所を出て、第一の岬を横斷して、その次ぎの岬の突出部、船を以て容易に接近し得る地點に、當日の刑場があつた。パジェスに刑場は一五九七年二十六聖人殉教のそれと同じ場所だが、少し海岸によつてゐるとあるのは、本圖によく合ふ。見物の中にも亦途中にも、西洋人がゐる。ジョルジがポルトガル人だけに同國人の同情を引いたに違ひない。日本婦人の被衣は如何にも美しい感を與へます。

第二　一六二二年殉教者圖 112 cm. × 158 cm.
左方上部の圓の中に Martyres LII in Japon. D×Sept. MDCXXII. 即ち一六二二年九月十日、日本に於ける五十二名の殉教者と判然讀める所謂大殉教(グラン・マルチル)として有名な事件だけに、之に關する單行の書物も可成ある。日本でも昭和二年神戸のトムソン商會から、一六二四年マドリッドで出版した『一六二二年日本に於ける恐るべき大殉教略記』Relacion Breve de los grandes y rigurosos Martirios que el año passado de 1622. をそのまゝ寫眞版とし、それに英譯を添へて刊行した位です。併しさういふ特殊の刊行物によらずとも、大殉教の顚末はパジェスの耶蘇教史 pp. 506-528 で詳細に解りますし、又その記事は本圖と甚だよく照應してゐます。同書によると刑場は一五七九年の殉教の

あつた地又殉教者の數は合計五十五名内譯火炙二十五名斬首三十名とある。今此の圖を見ると刑場の周圍は矢來を以て之を圍み、場内後列には二十五本の柱を立て、之に縛せられた殉教者の前後左右には毒蛇の舌とも見える火炎が迫り、その前列には太刀取の振上げた白刃の下に合掌して頸を延ばしたものや、既に身首所を異にし、首級を獄門臺に梟されたものや、信心堅固從容として死を待つものなどがある。殉教者の氏名は省略しますが、單に年齡からいへば、八十歳の老媼あり、（上段左から四人目がその老婦でせう）又三歳から五歳までの可憐な小兒が五人までゐる。國籍からいへばスペイン人あり、イタリー人あり、日本人あり、朝鮮人あり、宗派からいへば、サン・ドミニコ派あり。サン・フランシスコ派あり、又耶蘇會ありといふ風で、男女老幼を問はず、内外人を問はず、又宗派の相違を問はず、禁制の耶蘇教を說いた、信じた、教師を宿泊せしめたといふ點で、處刑せられたのであるが、小兒の處刑は就中酸鼻に堪へない。さうして場外には海陸を問はず、多數の男女が武器を携へた番人の背後に逼り、殉教者に同情の涙を注いでゐるが、その中に西洋人の幾群かゞゐることは注意に値する。パジェスによると當日刑場の周圍に集まつた人數は信者だけでも三萬人とある。圖中の人物の表情は勿論、衣服持物・四圍の風光の描寫といひ、決して凡作でないと判斷せられる。

第三　耶蘇會殉教者圖　104cm.×216cm.

前の二圖が或る分間に起つた光景を寫してゐるに反し、本圖は長い年月の間に生じた事件を一纒にして描いてある。前者が寫生畫なら後者は想像畫だ。

畫面は三段に分れる。最上段の中央に位して聖フランシスコ・ザビエーがゐることは、之を挿んで左に S. Franciscus Xaverius 右に Indiarum et Japoniae Apostolus 即ち印度及び日本の使徒聖フランシスクス・ザベリウスとあるので知れる。そのすぐ前に十字架を肩にした三人の耶蘇會士と、彼等に榮冠を與へんとしつゝある天使とを雲中に見る。三人の名前は畫像の下にある

左 S. Diogo Qisai 聖・デオゴ・キサイ

中央 S. Paulo Miqi 聖・ポーロ・ミキ

右 S. Joao Goto 聖・ジョアン・ゴトー

そうしてその左にラテン文で Fratres mei gaudium meum et corona mea 右に Sic state in Domini charissimi とある。前記三人は一五九七年二月五日長崎で磔刑にかけられた二十六聖人中、殊に著名の人々であることは、今更繰返す要もあるまい。

中段の殉教者中、左端の二名は斬首、その次の十五名は火炙になつた人々で、その脚下に見える氏名と處刑の年月日とを書取ると、次の如くになる。但し參考として括弧内に、ジェスの耶蘇教史に見えるフランス流の綴と、各人の最期の記事の同書に出て來る頁數を擧げた。

(1) Ir̃. Agostinho Ota, 16 agosto 1622. (Augustin Ota, 495.)

(2) P. Joao Bau. ta Machado, 22 Mayo 1617 (J. B. de Machado, 347.)

(3) P. Camillo Const. cio, 15 Setemb. 1622. (Camilo Constanzo 469, 491.)

(4) Ir̃. Lio nardo Qimura 18 novemb. 1619. (Léonard Kimoura, 423.)

(5) P. Mig el Carvaglio, 26 Aug. 1624. (Miguel Carvalho, 593.)

(6) P. Paulo Nauaro, 1 nou. 1622.(Pietro Paolo Navarro, 347, 538.)

(7) F. Dionisio Fuyxima, 10 Novemb. 1622. (Denis Aicou Foudgichima, 339.)

(8) F. Qnisu ca 10 Novemb. 1622.(Pierre Onizzouca, 539.)

(9) P. Iero mo de Ang lis 4. Desemb. 1625 (Girolamo de Angelis, 558-565.)

(10) Ir̃. Simao Iempo, 4 Dec. 1623. (Simon Yempo, 564.)

(11) P. Th Tzuchi, 6 Sept. 1627. (Thomas Tsuji, 666.)

(12) Ir̃. Thom Nixihori, 22 Jaho. 1633. (Thomas Nichifori, 785.)

(13) Ir̃. Thom Riucam, 30 Setẽb. 1633. (Thomas Riocan, 791.)

(14) Ir. Luis CaFuca, 30. Setẽb. 1633. (Luis Cafoucous, 791)

(15) Ir. Dinis Yama moto, 30 Setẽb. 1633. (Denis Yamamoto, 791.)

(16) Ir. Iacobe Tacuxima 30 Setẽb. 1632. (Diego Tacouchima, (?) 790.)

(17) P. An. to Pinto, 3 Setẽb. 1632. (Antonio Ichida Pinto, 740)

それから本圖の右端に西洋風の帆船が見えるが、その上部に(18)下部に(19)(20)(21)の氏名及び歿日を見る。

(18) P. Matheus de Couros Provincial Gouvernador de Bispado, 29 Outbr. 1633. (Matheus de couros, 796)

(19) Ir. Ambrosio Fernandes, 6 Janeio. 1620. (Ambrosio Fernandez, 432)

(20) P. An. fr. Cribana, 28 Nov. 1614. (Antonio Francesco Critana, 281)

(21) P. Gaspar de Castro, 7 Mei 1626(Gashar de Castro, 622)

とある。マテオス・ド・クーロ(18)は熱病に冒され、身を山奥に移さしめて死んだといふから、仰臥して路上に倒れてゐるバードレを指し、又ガスパル・ド・カストロ(21)は大木の下で疲勞して死んだといふから、肘を枕にして横臥してゐるバードレを指すに違ひないが、アムブロシオ・フェルナンデス(19)とアントニオ・フランセスコ・クリタナ(20)の兩名は何處に居るか。クリタナは一六一四年マニラに追放せられ、船が港に着いた刹那に死んだといふ。舷を摑んでゐるのがその人か。それで始めて船の畫のある理由が分りました。フェルナンデスは一六一八年長崎でカルロ・スピノラと同時に捕縛となり、大村の獄に投ぜられ、拘禁中に熱病に罹り獄中で歿した。船の左の肩にボンヤリ建物らしく見えるものは、或は大村の牢屋を畫いたのではないかと想像されます。嚴格にいへば以上四人は殉教者ではない。

下段に見える殉教者十八名中最左端に

(22) P. Diogo de Misquita, 4 Nouẽmb. 1614. (Diogo de mesquita, 281)

とあるばかりで、殘りの十七名の氏名は全く分りません。元來畫像の下にそれ〳〵記載されてあつたのでせうが、修繕の際塗潰してしまつたに相違ない。本圖はこの外にも修繕した箇所が少からずあつて、文字を書直した分は寫眞でもすぐ眼につく位です。

以上三面の油畫は西洋畫を學んだ日本の耶蘇教徒の手になり、さうして第一圖と第二圖とは事變後間もなく描かれたものと推定して萬々間違はあるまい。獨り第三圖は圖中の殉教者中氏名不詳のものが多く、從つてその歿日を明らかにし得ぬが、分つてゐるだけの年月では、一六三三年が一番遲いから、この畫の出來したのは、早くとも一六三三年、若しくはその以後といはれよう。

ヘック師と田口師と自分と三人の仕事は之で終つた。額面をもとの通りに掛け、砂埃にまみれた手を洗ひ、ゼス寺の階段の上に立つて互に左樣ならを取替した時は、十二時を大分過ぎてゐた。

附記

去年四月ヘック師から日本殉教者の圖はゼス寺の外、サン・フランシスコ派に屬するサン・アントニオ寺にもありと聞き、同月二十五日一見に及んだ。コロッセオからサン・ジョーバニ町を眞直に行くと、同名の廣場のオベリスクの下へ出る。右手に聳えるのが『一切の寺の母にして且つ首長なり』といはれるサン・ジョーバニ寺であるが、反對に左手の町筋メルラーノを少し行くと右側に目的の寺があり、その隣にコレジオがある。ヘック師から紹介狀を貰つた學長は折惡敷不在であつたが、秘書のナターレ・グッベルス師の好意で觀覽を許された。

本寺所藏の殉教圖は二十六聖人が長崎で磔刑にかけられる處を寫したもので、圖の中央跪いて双手を延ばし、十字架を抱かんとしてゐるのが聖ピートロ・バプチスト、その右手、獄卒に押へられながら兩眼を虛空に向けてゐるのが聖マルタン・ド・アッサンションでせう。兩名ともサン・フランシス

コ派の服裝をしてゐます。この圖は今サン・ジョーバニ寺の祭壇に近く左手のカペレの壁に嵌込んである。二メートル半四方の大作で、作者マリアノ C. Mariano の署名が右の下に立派にある。尤もこの寫眞は下部が少し不足で、署名は見えませぬ。流石に專門家の手に成つた新しい畫のことと

て、美事に見受けられます。

日本で出版になつた色々の書物に本圖を載せながら、毫も說明が加へてないので、自分の見聞した限りをなが〳〵と記しました。終に臨み秘書グッベルス師が自分の請を容れ、數日後使僧を以てこの寫眞を贈られたことを深く感謝致します。

昭和五年七月

幸田成友